服部氏著

當世利口女

定價壹友六分

眉毛を剃り笑へば口もとに
耳環と新の網巾
遊物主男ゝ乳をもつて
女ゝ附よ三ツ子さんあり

日本　利口女

48-7699

A760

當世利口女

万亭服部孝三郎著

矢部堰書

○童々日本の泰平の御代に生て物讀書のさゝえ
ならぬ身で某の妻となりて眉を刺歯を染しが
此頃弥らーきとを見聞せしあうゝ。女の眉毛
をそるゝと歯を染るを。ものゝ譬て戒し冊紙を見
しが。なゝるぬ身ゝて他の是非をいゝもあるとも
も愛國の為まさいその戒ゝあゝ身ゝをいゝとありさゝ

昔能因といふ歌よこの名所の歌をふと考へしが此さを家ゐいて披露してたる其情薄しとそ思ふ旅枕に出るといふ〻家ゐ籠りて毎日窓より首をさしいだして顔を日に黒色つ。やがて旅より戻り躰にて○有るをば震と光ゐ出しうど秋風ぞふる考る川の関といふ歌を披露るせうばその顔の垢つたるを、我見る人君を能因ゐいあらで垢人ありと笑ひましとの物語りにつりそ思とおもふ違へども其眉と歯のとを世上ゐ弘めんと工一人。已妻ふふ〻び春霞の眉を

かう世。又星の歯を雪の白歯ゐ磨せうとの風説、あり。かの歌よこの顔を黒めりといぶひて他を示に自ら改るい當然のをなり考へて后世上へ弘め〻し冊紙の趣意の要を摘でいたん。そも西洋人の説に眉毛い麗く歯の白さを婦人の面色を飾るさめ造物主の特ゐ意を用ひしのなり殊ゐ眉毛い面の飾のこるゝ〻光線の過劇を防ぐさめの要具るり人ゐ眉毛るきさを大陽の光線を上より直ゐ目ゐ受て眼病の源因とおることと多し故に

熱帯寒帯の土地は眉の濃薄あり斯まで造物主の深き趣意ありて眉ありと云へる此説いろ〳〵西洋人の吐出せしや心智開明の時なれども〳〵如き〳〵なるを聞て更に合點やうべ仰天の覆ひ地の限りの大世界に國々數多ありて其國々の掟風俗も萬國ひとしくべ茲に座を禮儀あるべしなるに立礼義あり其外替ることいさゝかあり譬へば両眼の國の人一眼の國にあらべかさゝといたるまんその一眼の國の人両眼の國にあらべ

べきかさゝといたるまんさるべかさゝもさるべ
かさゝるべぬもかさゝとるべいの國をへべりのことにあべ
やまと日本の妻室は古より眉を刺歯を染るい私どもは
ならべ國の風俗は定まりて今日に至まで眉なれ
女巨満あるもども眉無ものめは眼と日ふやうにて盲
目とかりさる者もあるく眉なれども眼が痛とい
ものをざふ聞ざるもだ今更西洋の薬草雑ふ憂草
ある業いあるとも今まで痛まぬ眼が今より痛
もせまでおるまふ類まるることあり諸人のうるむ莨の

家作の庇を放バ
雨雪ふ害あるい

目前ふ来る
眼の庇を
刺し女い
数多

「大陽の光劇を
防ぐ眉毛と附けるふ
あれ盲が

なるあふ盲目となり
きさ眼の痛むとつくりのを
古来よりいまに聞バ

西洋人
日本の地ふ
庇留して
面頰要具の
髭を刺

「日本のまゆとしたひげを
そつくりさんざのこころひ
きろふわうつたがよの
さぞ
よろろう

脂を喰ふ甚さるのみ〻私ど煙のうちゐを其脂籠う
を常ゐ吸へどつゐゐ害るさをしまさまど西洋の人
己が國の風俗をうして他國の風俗の是非といふ
ことなられうが日本の人情いさと造物主の産付
うる麗しき眉とゝ歯とゝ今となりてを其年
配ゐようて美とも見へ醜もありさまど衣裳でも
似合あり長年ゐ似合あり老年ゐ似合あり
まうく其人柄ゐようて似合とゐあうぶる縞色目ある
い書面の上の論ゐあうさび今その〻あしゐ雖ども

さう顔へ眉をおき三ツ四ツむ老を白歯ゐそまだ
しく化物と見う者あるとも言いうで美人と見うあ
おんやさて造物主勢帯寒帯の土地ゐようて眉
毛の濃き薄きを附属をうとうがかるで度の我
國中ゐ濃薄き眉あうをゞ見て知るべしそをとも
あ是眉毛い刺ねゞ元の如く歯も磨けゞ白く
何時改うもまるまゞ久人の女藝者の新造顔
も習日ハ内儀の年間顔となり又日るゝゞ内
儀顔ゐ眉をたう歯を白めて二度三度の拵ゐ歯

うを安々とども外國ふい是ようも甚しき業なり
そも天の産つけぬ金環を耳へ穿て父母けゞ
身の身躰へ疵をつけさと耳の輪を取ばそ疵
の痕生涯ふ癒ることなり それさへ身ふ害もるなり
また國の風俗とそ。その外造物主の生付し馬の
糞の玉さへ人知ふ拔取て騎兵或い馬車ふ驅使
ふそその身ふ害るく業ふ利あるを見れば人
人の眉毛を刺を天の罪人といへや誠ふ他國の善事
及び食物機械等を受る者い已ふ其利害を試し

あらしてのち施行とそふを識者ともいへさもなく
是も西洋ふ是も西洋と西洋の二字ふかぎされて
浮説ふ教へみちびく宝貨ふ費あるのみふにらず
一人の虚を萬人実ふ傳ふ既ふ是等のとい西洋
人も論語ありの新聞雑志七十六号 四葉五葉を見よ 此外珍らしき
ことをさゝぐ聞とへども國のことそそ百が一
を学もせば殊ふ外國へそ渡らばより渡れば
とて生國の事さへ一生ふい学ばさき身をなんぞ
五年や七年彼の地ふあれとて其地のことを

よく学び得難き事ゆ國ゆ在留せる他國人を
かるゝことなり。余暇あらばまざしもいふことはあまど
まゝあるゆゑ女の身ゆかゝる冒ゆ出のことをいゆ
りつゝいが意ゆ謬あるゝを誰ゆても教へて今まよ
王土ゆ住身い政府ゆ出るハ何等ゆ是非をいはん
さるさゆ私として國の風俗ゆ悖り世上の普通
ゆ異なる者にあらゝば渠こそ反て吾國のかさゝあ
とゝまい思ふぞ穴賢

當世利口女
新勢兒美談語
二ヤアチウ談
虫類大議論
明治六年三月
書肆
山嵜屋清七

服部氏著
万亭應賀著
同
同

010190522992

静嘉堂文庫
昭和六十三年三月
購入
同
正